

## 津軽民謡の伝承

—平館村を中心に—

はじめに

- 一 平館村の民俗音楽の状況
- 二 平館村の民謡の伝承と社会的背景
- 三 津軽の民謡の伝承  
おわりに

## 論文要旨

青森県東津軽郡平館村の民俗音楽を調査したところ、労作民謡はにしん漁でかつて歌われたにしん場音頭を伝えているだけできわめて少なく、また地域の共同体の生活と結びついた歌も、ひじょうに少なかった。そしてその代りに津軽民謡として全国的に有名な「じょんから節」などが歌われ、日本海沿岸諸県や北海道の民謡も、盆踊りや酒宴などで多く歌われていた。

そのため平館村の人々がどのように民謡を伝承してきたのか調べてみた。その結果、もちろん従来のように暮らしの中で自然に覚えてきた例もあったが、むしろラジオ、レコード、民謡の旅芸人たちの歌会、門付けするボサマの歌などによって、プロの民謡を覚えた形が主流であった。

平館村は近世に入ってから移住者たちによって開かれた村で、漁業中心の

生活がつづき、集落の共同体の組織も弱く、共同体の生活の中で伝えられることの多い伝統的な民俗的な諸事象も、束縛が弱く、新しいもの、他所のものを気安く受け入れ易い状況があることがわかった。

ところがこうした平館村の民謡の伝承の状況は、実は平館村だけではなく、津軽全体に共通する現象であることがわかった。津軽ではすでに大正期からプロの民謡歌手たちが多数輩出し、民謡は文字通り生活の糧になっていた。また青森県の代表的な地方紙である東奥日報社が、早くも昭和九年から津軽民謡のコンクールを行っており、これが津軽の人々に熱狂的に受け入れられた。

こうして一方では津軽民謡はプロの芸人たちの手で、全国的に知られるようになるとともに、一方ではそれ以外の地元の民謡を忘れさせ、すたれさせる結果になったのである。

そして津軽の民謡が早く経験したこのような状況は、今全国の民謡に現われ始めている。その意味でこの津軽の民俗音楽の状況は、津軽地方の民俗音楽の地域的特性を表わしているばかりでなく、現在、日本全国で起こっている民俗音楽の今後の動きを示す例としても注目される。

小島 美子

## はじめに

本共同研究の当初に研究方法について討議した際、日本全国に定点調査地を設け、共同研究期間中、継続的に調査研究を行うことを決めたが、その中に青森県東津軽郡平館村たいらだてむらがあった。私の研究分野である音楽学の上で、この平館村が特別に興味や関心をそそる問題のある地域というわけではなかったが、共同研究のメンバーが、それぞれ定点調査地の調査を担当しなければならないという共同研究の必要性から、私はこの平館村の調査を担当することになった。

また研究経過について述べた別稿でふれているように、この共同研究は当初、三期に分けて行う計画をもっていたために、私の研究分野は一応第三期に入るであろうと考え、実際に調査に入ったのは、この六年間の共同研究の最終段階であった。

このような事情から、正直なところ大きな期待を持たずに平館村の調査を行ったのだが、実はこの村の民俗音楽の状況は、きわめて大きい問題をはらんでいた。これまで私たちが民俗音楽の必要条件として考えていた地域社会との強い結びつきが、ここではきわめて弱くなっている。これは何を意味するのか?と考えを進めるうちに、実はこれは平館村だけの問題ではなく、津軽全体に共通する問題であることがわかってきた。さらに驚くべきことに、津軽ではこの状況はすでに第二次大戦前に始まっていたことも明らかになってきた。従来津軽は民謡がきわめて盛んな

ところと考えられてきたが、その実態は何だったのだろうか。

そして今やこれに似た状況は、日本全国に急速にはげしい勢いで広がっている。その意味では津軽は日本の民俗音楽の先行形態を、おそらく日本でもっとも早く、もっとも典型的に示してきたのである。それは一つには津軽地方の地域的特徴として捉えることができるが、また同時にこの日本の民俗音楽の急激な変化を、変質と捉えるべきか、衰退と捉えるべきかという大きな問題につながっていく。そしてこの問題はさらに民俗音楽の問題だけでなく、日本の民俗文化全体の問題にさえ連なっていく。

そうした二つの意味で平館村の民俗音楽の問題は、思いがけぬ大きな展開を示すことになった。

### 一 平館村の民俗音楽の状況

平館村の地理的状況や社会組織、民俗などの全体状況については、山本質素論文がすでに述べているので、ここでは述べず、すぐに民俗音楽について述べることにする。

さて私が平館村の民俗音楽を実際に調査したのは、一九九一年七月である。きわめて短期間の調査であったが、平館村教育委員会の全面的なご協力によって、ひじょうに集中的な効率のよい調査を行うことができた。その際採録し得た曲を表1の上段に示した。直接に歌って下さった方は十名、その他インタビューに応じて下さった方々も約十名近くあつ

た。収録曲の種類は三十二種、延曲数は四十曲になった。

表1の下段には、一九八六年から八七年にかけて行われた民謡緊急調査（文化庁の国庫補助事業として青森県教育委員会が行ったもの）の際に採録した曲を示したが、その際の演唱者は十一名、曲の種類は十七種、延曲数は十九曲である。この際調査を担当されたのは、同村の舟岡集落に在住される金沢秀吉氏で、今回私も大変お世話になったが、平館村の全体状況について詳しい方である。この二つの調査の収録曲がひじょうに多く重なっていることから考えても、今回の私の調査は短期間ながら、この平館村の民俗音楽の状況を基本的には捉えることができたのではないかと思う。

さて今回調査してまず驚いたことは、平館村独自の歌、仕事の歌がきわめて少ないということであった。表1では二つの調査に重なって現われている「じょんから節」などを「津軽の民謡」としてまずあげたが、実はこれらの歌は、全国的に知られている代表的な津軽民謡である。民謡を歌う旅芸人たちが早くから歌って練り上げた舞台民謡であって、平館村、あるいはその各集落の地域共同体の生活とは、直接的にはほとんど関わりのない歌である。

次に平館村の人々が仕事や年中行事などに歌う歌、子守歌、わらべ歌などを、平館村の歌としてまとめてみた。こうしてみると十五曲もあり、先に私が述べたことばは当たらないように見えるかも知れない。しかしよく検討してみると、ほとんどの歌が他の土地と共通の歌である。

まず「にしん場音頭」は典型的な仕事の歌で、かつて北海道でにしん

漁が盛んな時代には、この歌によって作業が進行した。船が出るときに歌（木やり音頭）、網起しの歌、沖揚げ音頭（ソーラン節）、子叩き音頭（いやさか音頭）、船が戻るときに歌（第一曲と同じ）などの歌が一連の組曲になっており、日本民謡の中でもっとも力強く、抜群の構成感をもった美しい男声合唱である。すでに山本質素論文が述べているように、この村からはにしん漁を求めて北海道にわたり成功した人もいるし、その人などを頼ってにしん漁の出かせぎに行った人々も少なくなかった。この歌を歌われた福井米吉氏もその一人で、これはもちろん北海道で実際に歌われた歌である。

民謡緊急調査では、五十年前の野田集落のタラ網のはやしが収録されており、それが特筆されているのだが、その内容については報告書に記載されておらず、簡単なかけ声のようなものかと思われる。このはやしを歌われた木浪小三郎氏は、今回の調査期間中は入院されていて、収録することができなかった。

「お山ばやし」は津軽では広く行われている岩木山へのお山参詣のはやしの歌である。平館では登りは「さいぎ、さいぎ」、帰りは「パッタラ、パッタラ」と歌い始めるといっているが町村によってそのことばには差異がある。

盆踊りはかつてはきわめて盛んだったらしい。元宇田集落の最上芳治氏（大正八年生）によると、若い頃には七月一日から八月二十日まで約五十日間にわたって、雨が降らない限り毎夜踊ったという。場所はこの集落にある日蓮宗の聞法寺の境内で、先代の住職が盆踊りが好きで踊ら

の 民 謡

の 歌							他 県 の 民 謡							他ジャンルの歌							
中	子	あ	ず	ま	ま	自	今	江	秋	ド	杓	大	最	花	ま	お	佐	米	チ	ど	浪
陰	守	や	く	り	り	作	別	差	田	ン	子	黒	上	笠	む	け	渡	山	ヤ	ど	曲
和	の	こ	り	ん	ん	の	の	追	馬	ド	舞	舞	川	音	ろ	さ	お	甚	ン	い	
讃	歌	の	の	て	て	歌	田	分	子	ン			舟	頭	川	節	け	句	キ	つ	
		歌	か	ん	ん		草		歌	パ			歌		音	さ	さ	お	お		
		け	け	て	て		取			ン					頭	さ	さ	は	お		
		声	声	ん	ん		り			ン					頭	さ	入	け	け		
				ま	ま		歌			ン					頭		り	さ	さ		
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						
				り	り					ン					頭						
				ま	ま					ン					頭						

表1 平 館 村

調 査 名	演 唱 者			津 軽 民 謡					平 館 村									
	集 落 名	氏 名	生 年	じ ょ ん か ら 節	よ さ れ 節	お は ら や 節	あ い や 節	謙 良 節	山 歌	に し ん 場 音 頭	野 田 の タ ラ 網 の は や	お 山 ば や し	盆 歌 越 後 節	盆 歌 (ア リ ヤ リ ヤ ン)	盆 歌 (イ ヤ サ カ サ ツ)	数 え 歌	法 然 和 讃	十 念 和 讃
'91 調 査	元宇田	浜田 きせ	大正13	○		○	○	○										
	〃	田中 金郎	大正11															
	〃	最上 芳治	大正 8				○						○					
	弥藏釜	高畑 ふさ	明治40														○	○
	今 津	福井 米吉	明治45							○		○		○				
	〃	福井 ソワ	大正 1															
	〃	福井 権作	明治42	○	○		○		○									
	〃	福井 むめ	大正 4															
	舟 岡	越田 キヨ	明治40											**				
〃	中島 フミ	大正 9				○						○		○				
'86 '87 民謡緊急調査	元宇田	浜田 きせ	大正13	○		○		○										
	〃	田中 金郎	大正11															
	〃	最上 芳治	大正 8				○											
	〃	最上 福松	大正14						○									
	弥藏釜	高畑 ふさ	明治40														○	
	根 岸	石田 定蔵*	明治42		○													
	野 田	金沢 つよ	大正 5															
	〃	前田辰太郎*	明治36								○							
	〃	藤田 キ子	明治40															
	舟 岡	金沢 いま	大正 5															
磯 山	木浪小三郎	大正 2				○			○									

\* 91年にはすでに故人になられていた方

\*\* 2人一緒に歌われた例

なく、この盆踊りが唯一の楽しみであったという。舟岡集落でも盆踊りは盛んだったようで越田キヨさん（明治四十年生）と中島フミさん（大正九年生）によると、歌もいろいろあったようだ。まずよく歌われた盆歌が「イヤサカサツサ」というはやしことばが入る歌で、明らかに「アリヤリヤン」と同系統の「いやさか音頭」であるが、ここでは最初の「ヨイヨイヨイヨイヨイヨイ」の句は歌われていないので、表1には一応かっこづきで「イヤサカサツサ」のこ とばがあることを示した。この曲のオリジンについ

ては各説あるが、少なくとも「鱒ヶ沢甚句」は同系であろう。七七七五調であるが、その最後の五のあとに同句をくり返し、さらに第三句の七のうちの後の四、さらに第四句の五をくり返す詞型が基本になっている。津軽地方で広く盆歌として歌われている「津軽甚句」(「どだればち」などという)も同系といわれるが、この平館村舟岡の方々も「どんだれ節」「どんだればち」と同じではないかといわれていた。

舟岡では「越後節」という盆歌も歌われたが、この歌も民謡緊急調査報告書<sup>(2)</sup>では青森市や平内町で収録されている。この報告書によると、この歌は「昔は△越後甚句▽と呼んだ。新潟県から流れてきたか、あるいは津軽から出稼ぎに行った人達が持ちこんだ歌と考えられる。同歌は金太・豆蔵津軽人形劇や津軽民謡座長大会の幕あけに景気づけとして使われてきた」という。後述のようにこれらの旅芸人は平館村にもたびたびきているので、それを村の人々が覚え、盆踊りに流用した可能性も考えられる。いずれにせよこの歌も平館村あたりの独自の歌ではないことは明白だ。越田さん、中島さんによると、「ドンドンパンパン」(山形県の「ドンパン節」)や「佐渡おけさ」「じょんから節」などでも踊ったという話なので、覚えた歌は何でも盆踊りにとり込んだものと思われる。この点は平館村の民俗音楽について考える場合の、一つの問題点なので、これについては後にふれる。

それと関連して注目すべき例は、平館村の西隣に接する今別町の「田の草取り歌」を、この同じ舟岡では盆歌として歌うこともあるということである。今別町は津軽海峡に面しているため、農業の条件は悪く、や

はり沿岸漁業と林業が中心の町だが、平館村に比べれば水田は広い。しかしこれまでの私の知る限りの調査報告では、後に述べるように、東津軽郡や北津軽郡では「田の草取り歌」は報告されていない。その意味でもここで今別町の「田の草取り歌」が収録できたのは珍しい例といえるべきだろう。越田キヨさんが今別の水田のある集落から嫁にきているために、この歌を知っておられたのだが、水田のまったくない舟岡で生まれ育ち、舟岡で結婚された中島フミさんもしつかりと歌われたのは、舟岡でも盆などに歌われるためらしい。

次に「教え歌」は、人々が集ったときにみんなで歌う歌だそうだが、これも緊急調査報告書の中で、平館村の南西に接する蟹田町で収録されているものと、まったく同じである。また南津軽郡大鰐町で収録されている「津軽教え歌」とも同系で、ここでは「二人で掛合形式で、その当時の世相を諷刺する歌詞、あるいは物語などを歌った。津軽民謡を興行するようになってから歌うようになった」と解説されている<sup>(3)</sup>。やはりこの歌も民謡を歌う旅芸人の力が関わっているらしいことがわかる。

次に和讃は広く歌われたようで、舟岡では稲刈りの手伝いに行って和讃を歌ううちに、歌詞がわからなくなって話し合っていて、つい稲束が大きくなり過ぎたなどという話を聞いた。民謡代りに歌っていた有様がうかがえるが、もちろんこれもこの地域独特の歌ではない。

また子守歌も津軽地方では広く歌われている(泣けば(寝ねば)山からモッコア来るね)という歌詞の入った歌である。わらべ歌については別の諸条件を考えねばならないので、ここでは取り扱わないことにする。

このようにしてみると、民謡、または民謡に準ずる和讃も含めて「平館村の歌」という項目にまとめられたけれども、実はその中に平館村の地域社会ととくに結びついた歌はほとんどなく、大部分が「津軽の歌」に解消されてしまう歌であることがわかる。

自作の歌は高畑ふささんによるもので、この村の唯一の開業医で村長でもある「木村先生を讃える歌」である。メロディは歌謡曲のメロディを借りたもののようなのだが、ここでは歌詞を作ることが、それ程特別の感覚のものではなく、むしろ日常的に自然に行われたものらしいところに注目したいと思う。この村の人々は新しい歌詞を気軽に替え歌的に作っているのだ、盆歌の歌詞も多いらしい。これは平館の人々の創造性と考えることができる。

さらに踊りについても、この創造性のゆたかさは注目に値する。舟岡の中島フミさんはたとえば「アイヤ節」に独特の踊りをつけ、トラボ、(バッタのこと)踊り、と称している。また元宇田の浜田きせさんのご主人の浜田義光さん(大正七年生)は、新しい歌を聞くと、その歌詞をすぐ書き取り、それによって拍子がわかる。それで自分で工夫した舞踊譜によってすぐ振り付けしてしまうという。足の動きは約束ごとが多いので厳しいが、手は自由に動かせるし、一夜にいくつでも作れるという。この舞踊譜は普通よく使われている人の体形をかたどったものと大体似ているが、きわめて能率的に記すことができるようだ。浜田夫妻は舞踊の名手と民謡の名手のカップルで、村の芸能の催しなどではしばしば新しいものを作って演じているらしく、村内では有名である。

さて民謡に話を戻すと、表1をみれば他県の民謡がいろいろよく歌われていることがわかる。この村では民謡歌手から習う民謡教室はまだできていないので、師弟関係でこれらの歌を歌っているのではないことがわかる。そして「佐渡おけさ」「ドンパン節」などは前述のようにすでに盆歌になっていっているばかりでなく、歌謡曲の「チャンチキおけさ」も盆踊りに歌われている。これらの他県の民謡は、今のところ北海道、秋田、山形の歌が多い。それから山本質素論文でもふれているように日本海沿岸からは多数の人が津軽にきており、その意味で越後、越中、越前、若狭は交流があり、それらの歌も多数入ってきている。山形、秋田の歌もその北に連なるものと解釈することもできよう。そして他県の民謡を歌う傾向はますます強まりそうで、津軽民謡の枠さえものり越えていきそうな勢いである。

この結果を見て、当初私は調査が遅きに失したかと考えた。ところが表1で明らかのように、今回の私の調査とほぼ五年前の民謡緊急調査の調査結果は、基本的にほとんど変わっていない。仕事の歌は「にしん場音頭」など漁の歌二曲だけであって、私が一応「平館村の歌」の項にまとめた歌は、その他和讃が二曲収録されているだけである。これらを見れば、この状態が少なくとも近年急速に起こったものではないことは明らかである。それでは何故このような状態がそれ以前から起こっていたのか、考えてみたい。

## 一一 平館村の民謡の伝承と社会的背景

平館村の民謡では労作民謡はきわめて少ないこと、平館村の地域共同体の生活との結びつきが弱いこと、いわゆる代表的な津軽民謡を人々は競って歌い、半ば平館村の民謡のように歌っていること、さらに日本海沿岸の各県や北海道の民謡までも自由にとり込んで、民謡のように歌っていることなどが前項で明らかになった。このような現象は、他の地域では比較的最近明らかになってきた民俗音楽の一種の現代化した姿である。そういう状態は地域の共同体の生活と結びついた民俗音楽の従来の姿が、もはや消えかけていると解釈することもできる。

それではなぜこういう現象が平館村ではいち早く起こっているのか？ それを知るために、平館村では民謡がどのように伝承されてきたのか、実際に当たってみよう。

a. 浜田きせさん（大正十三年生）の場合は、隣町の蟹田町下小国から嫁にきた。浜田さんの歌の先生は、もっぱらラジオから聞える津軽民謡であった。姑たちの眼を盗んで、紙に鉛筆で歌詞を書きとめて覚えた。とくに成田雲竹女の歌が好きでそれをまねたので、「得手ぶし」（得意のふし）は、「おはら節」なども「中節」ぐらいに当たるだろうという。津軽では歌い手でも三味線弾きでも、競って新しいテクニクを編み出して演じるので、メロディが変化していく。そのため「じゃんから節」には、旧節、中節、新節があるといわれるが、その中節に当たるといっ

けである。現在津軽民謡の第一人者である福士りつきさんに聞くと、今自分が歌っているふしは、新々々節ぐらになるだろうという。そして競いあって難しくし過ぎたために、多くの人々が歌えない形になってしまったのを、逆に今は心配しているという。それを裏付けることばは平館でも二回聞いた。いまの「じゃんから節」は遅くなって踊れなくなったというのである。技巧を聞かせるために、歌が複雑になって、テンポも落ちているのである。

浜田きせさんの場合は嫁にくる前には、蟹田で実兄の歌う「アイヤ節」を聞いて覚えたそうだから、きせさんは新旧二つの伝承方法を経験していることになる。

b. 田中金郎さん（大正十一年生）の場合は、元宇田で生まれたが、第二次大戦中は一家中で中国に行き、漁業をやっていた。帰国してからは、各地の出稼ぎ先で民謡を聞き覚えで覚えた。「秋田馬子歌」はテレビの番組で覚えた。

c. 最上芳治さん（大正八年生）の場合は、生家の隣に宿屋があり、ここに津軽民謡を歌う旅芸人たちがやってきて歌会を開いた。函青国子、津軽家すわ子など代表的な歌手たちもやってきて、津軽民謡を教えることもあったので、そこで習ったという。もちろん盆歌は盆に踊りながら覚えた。また門付けのボサマ（眼の不自由な座頭）もよくきた。太鼓、三味線もつけていた。このボサマのあとをつけて歩いて聞いて覚えた。覚えるために人のいない所を探して歌い、成人してからは沖に出た舟の上で漁の合間に歌ったり、山の中でも歌ったりした。

d. 福井権作さん（明治四十二年生）の場合は、小学校の一年から六年まで唱歌は甲で、歌が大好きだった。民謡はもっぱらレコードで覚えた。レコードは二百〜二百五十枚ぐらいもっていて、仕事が終れば枕元に蓄音機をおいて、レコードをかけては覚えた。とくに成田雲竹や工藤玉枝が好きだった。歌って米や金をもらおうホイド（乞食）もきたが余り上手ではなかった。金太豆蔵の人形芝居や芝居の沢田蔵之助一座などもよくきた。この金太豆蔵の人形芝居は今でも活動しているが、今津出身の福井ミヨさん（大正元年生）も、よく廻ってきたといっている。当然これらの芝居や人形芝居が持込んだ民謡もいろいろあったと思われる。

もちろんこれらの他に、北海道のにしん漁の現場でにしん場音頭を覚えたり、盆踊りの場で盆歌を覚えたりというような、地域共同体の生活の中で両親や祖父母、あるいは歌の上手な親戚や周辺の諸先輩から自然に教わるという従来の伝承の形も多少はあったようだ。しかしこの地域で歌がうまいといわれているような人々は、ラジオ、レコード、民謡の旅芸人たちの歌会や指導によって、平館の民謡ではなく、いわゆる津軽民謡を学習しているのである。すでに平館では従来の民謡の伝承形態がこわれて、プロの芸人たちの歌を学習する形が始まっているわけである。この二十年近くの間、ようやくこうした状態が進んできたのが、日本の普通の町村における民謡伝承の姿であるが、すでに平館では、こういう形が大正期か、少なくとも昭和初期から始まっていたのである。

それではなぜ、平館では民俗音楽における現代の動きを先取りするような動きが、こんなに早くから始まったのであるのか？ おそらくこう

した動きは平館村だけの動きではなく、津軽民謡全体の動きと連動しているはずであるが、それを見る前に、とりあえず平館村ではこういう動きをもたらすような社会状況があったのかどうかについて、簡単にふれておきたい。

この村の一般的な状況については、山本質素論文がくわしく述べているので、それを参照されたいが、その基本的な点だけを述べておく。この村の歴史は、古い時代についての伝承はいろいろあるが、実際に集落を形成し始めたのは、十六世紀頃からで、若狭、越前、越後からの移住者が多かった。この村の場合、農業に適する条件は少なく、また林業もきわめて小規模で、結局は漁業中心に発展してきた。おそらくは移住してきた人々も漁業の関係者が多かったのではないだろうか。一般的にいうと、定着している水田稲作農耕民が移住する場合は、余程の要因、条件が必要だが、海洋民は比較的気安く移住することがある。実際にこの平館に移住してきた人々の中には、さらに北海道に移住した人々も、近世から見られたし、また現在もいるし、またにしん漁などで北海道にいわば季節労働者として出かける人も多かった。少し極端ないい方をすれば、この村の場合、村への定着性が弱いともいえるし、逆に外に積極的に発展していく気風が強いということもできるのではないだろうか。ここには古くからの伝統性に強く縛られる稲作農耕民の社会とは異った開放的な気風がある。

山本質素の調査によると、漁業における共同作業なども、家族や親戚などの関係で行っているところが多く、地縁的な関係はひじょうに薄い

という。また集落の組織も第二次大戦中に組織された隣組以来の組織で、歴史はたいへん新しく、その点で他の土地とは目立って異っているのだそうだ。

こうした社会的な条件は、当然そのまま民俗音楽の伝承に反映する。

普通は集落単位に展開される民俗芸能もそれ程盛んではないようで、正月の権現様まわしといわれる獅子舞、三月三日桃の節句の日の笹すべりの競争、田植えのあとの虫送りや荒馬、八月の盆踊りなどがあったが、いずれも今はやらなくなったり、やっても盛んではないという。

全体として集落の組織によって保持される伝統性は弱く、新しいものに対して、また外来のものに対してこだわりなく受け入れる気風が生まれ易い社会的な条件があることがわかる。

また農業が盛んではないから、農業関係の歌がまったくなくことも理解できる。やはり労作民謡としては漁業しか生まれようがないのである。今津集落の木村キミエさん（大正十五年生）の話によると、漁師さんたちの櫓を漕ぐ時の声は勇ましく、戦後もずっと聞えたという。これは動力船が導入されたために聞えなくなったのは当然だ。

元宇田集落の浜田きせさんは、すでにふれたように蟹田町の出身だが、農家の嫁にはなりたくないという気持から、漁師の嫁になった。しかし漁師の、他の人には負けたくないという露骨な競争心がいやだったと語られた。元宇田では漁の舟は各戸にあって、漁師一人、あるいは妻と二人で乗って漁に行くので、漁の場ではげしい競争になるといふ。漁の場を離れば、近所同志は親しい関係に戻るのだけれども、漁の場の空

気はすさまじいのだと、浜田さんは苦笑まじりにいわれた。この話は農民と漁民の集落の組織や生活感覚のちがいを示しており、山本質素の報告とも符合する。

漁業については、演唱者の他、浜田義光さん（大正七年生）、鷺尾小次郎さん（明治四十五年生）などからも多くをうかがったが、季節により魚種が異り、魚種が異れば漁法も漁の場も異り、また年代によっても魚種や漁獲量にかなりの変化があったらしい。その点からも一定のスケジュールに従って作業を行えば、一定の収穫がほぼ期待できる農業の生活とは大きな違いがあり、生活感覚に違いがあるのは当然であろう。

こうした漁業中心の生活がまた、すでに述べてきたような民俗音楽の状況を生み出す条件を形づくってきたと考えることができる。

### 三 津軽の民謡の伝承

一九八一年に私は九学会連合の日本の風土についての共同研究のため、津軽地方の調査を行ったことがあった。その際は津軽民謡や津軽三味線のあのダイナミックなリズム感が何から生まれるのかという問題を抱えての調査だったので、今回のような問題については、その際はまったく考えていなかった。そのため当時の調査資料を調べ直してみた。この時は津軽三味線奏者として活躍している山田千里氏、またいわば古い旅芸人の生き残りの存在だった長尾邦正氏（明治三十五年生、その後死去）の出身地を中心に調査したのだが、また津軽三味線奏者として、もっと

も津軽三味線らしいスタイルを築きあげたといわれる木田林松栄氏の出身地である平賀町の調査も行った。平賀町は南津軽郡でも南東端にある町で、つまりもともと内陸部にあり、マガギの多い町でもある。平館村とは対照的なりんご栽培などの町なのだが、驚いたことに、やはり労作民謡はまったく収録できていなかった。調査の時間が短かったため、それ程意識していなかったのだが、「しょんから節」などのいわゆる津軽民謡が少数収録できただけであった。これがちょうど十年前である。

この同じ共同研究のために、私は一九八三年に鳥取県賀露町、鳥取県岩美町、福井県三国町安島、新潟県旭村、そして佐渡など主として漁村を多く歩いたのだが、どこでも労作民謡やその土地の生活に結びついた歌を多数収録しており、平賀町の調査結果はやはり目立って異っていることに、今回初めて気が付いた。そのため、より古く、より広い調査資料を調べ直してみることにした。

### (一) 『日本民謡大観 東北篇』の津軽民謡

『日本民謡大観』は日本放送協会が町田佳聲氏を中心にしたスタッフによって、第二次大戦前から半世紀近い年月を費して行った日本民謡の一大集成である。この東北篇は、昭和二十七年に出版されたものだが、実は昭和十九年にはすでにすべての版下ができ上り、同年に出版された関東篇に引きつづいて出版される予定であった。それが戦争の激化と敗戦後の混乱によって遅延し、ようやく昭和二十七年に出版されたのであった。したがって、この曲集に収録されている曲は、すべて昭和十九年

以前のものである。その意味では津軽民謡の戦前の全体状況を知るために好適の資料と考えられる。

さてこの曲集には青森県の民謡は、九十曲収載されているが、そのうち津軽地方の民謡は意外にも二十七曲しかなく、残りは上北、三戸、八戸など旧南部藩領、つまり南部地方の民謡である。さらに驚いたのは津軽地方の労作民謡の少なさである。子守歌を別とすれば、木造町の「田植歌」、田の草取り歌にも盆踊り歌にも歌われるという青森市の「ホイハイ節」、やはり青森市の「馬方道中節」の三曲しか入っていない。農業に関する代かき、田植え、田の草取り、米搗ぎ、粉搗ぎなどの歌はすべて南部地方の歌である。そして津軽地方の民謡としては、「津軽山唄」「けんりょう節」「弥三郎節」「あいや節」「津軽音頭」「しょんから節」(四例)「小原節」「黒石甚句」「岩木山参詣歌」「ナヲハイ節」「十三の砂山」「嘉瀬の奴踊」「どたらば」「黒石よされ節」(二例)「津軽よされ節」「鱈ヶ沢甚句」「津軽盆踊甚句」の二十一例と子守歌三例があげてあるだけである。これらの民謡はすべて全国的にすでによく知られた民謡ばかりである。つまりすでに民謡歌手が歌い、舞台歌謡化しつつあった歌が並んでいるということである。後に述べるように津軽ではひじょうに早く民謡の職業的な歌手が出た。すでにその人々の歌が、ここに収録されているのである。

しかしこの曲集だけでは資料に問題があるかも知れないので、他の資料も調べてみた。

(二) 『東北民謡集』の津軽民謡

『東北民謡集』はやはり日本放送協会から出版されたものだが、仙台在住の武田忠一郎氏がやはり戦前から収集された資料を各県ごとにまとめて出版されたものである。この青森県の巻は昭和三十一年に出版されているが、資料はもちろん古いものと考えられる。

さてこの曲集には三百二十曲が収載されているが、やはり津軽地方の労作民謡はきわめて少ない。「田畑稼ぎの唄の部」には十四曲収載されているのだが、そのうち津軽地方のはやはり木造町の「田植歌」だけである。そして「庭稼ぎの唄の部」と「産金の唄と銭吹き唄の部」「放牧(牛馬)の唄の部」には津軽の歌は一曲もない。ようやく「山唄の部」に「津軽山唄」が四例登場し、「地形唄(その他)業唄の部」に「津軽洞突き唄」一例、「海の唄の部」に「十三の船唄」が一例現われるだけである。

しかし「盆踊の唄の部」になると、五十八曲中二十五曲も津軽地方の歌があり、さらに「祝儀酒盛りの唄其の他の部」でも、三十五曲中津軽民謡は十五曲ある。そのあと「祭り唄祭典囃子其の他の部」になると、ふたたび南部地方の歌が断然多くなり、百二十四曲中津軽の民謡は三十三曲に過ぎない。この曲数は獅子舞とか駒踊りなどの一つの芸能の中で演じられる各曲を、一曲として計上しているのだが、芸能の数としてもやはり南部の方がはるかに多い。もちろん実際に民俗芸能の数は、この『東北民謡集』に収載されている数よりも、はるかに多いのだが、一般

に比較的よく知られている芸能としては、やはり南部の方がはるかに多いのも事実である。ここにも実は津軽と南部のちがいがあがる。南部の方が集団芸が盛んなのである。

こうしてみると、この曲集でも津軽の歌は盆踊りの歌と酒宴の歌に多いのであって、その曲種もほとんど『日本民謡大観』と重なっている。ただ少し目立つのが盆踊り歌の中の「イヤサカ踊」や「黒崎盆踊唄」などであるが、とくに「イヤサカ踊」はすでに述べた「いやさか音頭」と同系の歌である。

このような津軽地方の民謡の状況について、すでに武田忠一郎氏はある程度つかんでおられたようで、巻末解説の「東北の民謡概観」の青森県の項に次のように述べておられる。

「民謡のレコードで一番多く吹込まれる種類の唄は、所謂津軽物であるし、又一番多く捌かれる地方といえば、やはり青森県であったという。津軽物と称されるのは『ヨサレ』『ジョンカラ』『津軽小原』等口説系統の唄であるが、之を純粹民謡という立場から検討することは暫くおいて、何がこの様な盛況を呼んだかと考えて見るのも一興であろう。津軽地方は明治も中頃までは余り裕福ではなく、冬季などは男女共他へ出稼に行く者も相当あった。然し今では林檎と唄のおかげで、貧乏する者が無いという。戦争直前までは季節になれば隊を組んで唄の組が樺太、北海道から関東地方まで澤山出て行った。従って唄は一つの商売であって、楽しみにうたって居た頃とは凡そ唄に対する価値判断が違って来たわけで、美聲の娘は早く縁づくという話はこの地方では笑い話ではない。次に東

奥日報など、青森市の新聞社主催で民謡競演会が毎年開かれて来たこと、その決戦の日となれば、会場は超満員の盛況を呈し実に物凄い熱狂振り……（これは見ない人には想像もつかない。）」

ここではすでに民謡が生活の糧になっていること、それを「純粹民謡」といべきかどうか武田忠一郎氏自身はおそらく疑問に思っていたこと、青森県の場合、全国でもっとも早く民謡コンクールが始まっていたことなどの事情を知ることができる。

これをもう少し詳しくわしくみてみよう。津軽三味線の山田千里氏によると、すでに大正の初期から、嘉瀬の桃といわれた人が、「美声のうえに、三味線を自分で弾き、唄の文句も即興でやり、そのうえ、漫芸で笑わせたので、たちまちもてはやされ、人気者になりました」という。この人が、「プロ（本業）の芸人として、第一号」になったというのだから、驚くべく早い。「江差追分」はより早く東京で認められたが、プロの芸人たちが多く輩出するということはなかった。その頃、種里の松とか出崎の坊と呼ばれた人々もプロ的な活動を始めていたが、大正末期から昭和になると、津軽家すわ子、函青国子など多くのプロの歌い手が登場して、「津軽民謡界は『黄金時代』<sup>(5)</sup>を迎え」たという。この頃のこの芸人たちの興行の仕方は「宵宮や神楽の期間に部落の集会場や民家に舞台をつくり、木戸銭をとる興行として唄会を行うようになりました。それが各地でさかんになり、ふくれあがり、五、六百人も収容する芸居小屋へと舞台が移り、唄い手たちは十〜十五人の一行を組み、旅巡業するようになったのです」というような本格的なものだった。そして踊りや漫才、

手品なども加入させ、当時盛んだった浪曲のような舞台をつくり、大変な人気で、北海道、樺太、東北などを巡業してまわったのである。

また青森県の地方紙である東奥日報は一九三四（昭和九）年に発刊されたが、このような民謡の人気をみて、発刊記念事業の一つとして、同年八月に「青森県民謡大会」を開き、その後第二次大戦の末期までそれをつづけた。これは大きな民謡コンクールのもっとも早い例である。これを津軽の人々が熱狂的に喜んだことは先の武田忠一郎氏のことばによっても想像がつく。こうして津軽ではひじょうに早くから、民謡は職業的な芸人たちの生活の糧としての歌になったのである。

こうした動きは、一方ではかえって他の民謡を忘れさせる。たとえば「祖谷の粉挽き歌」という民謡は全国的に有名な歌だが、この歌の故郷である徳島県西祖谷山村の調査を行ったところ、村ではこの歌を含めて七曲の民謡を、祖谷の民謡としてパンフレットを作り、村の人々に歌わせていた。そのため、それ以外の民謡を村の人々は歌わなくなっていた。こうした実例はいくつでもあげることができる。

すでに述べたように、私は一九九一年のわずかな調査で今別町の「田の草取り歌」を収録している。おそらくは津軽でも労作民謡がなかったはずはない。また津軽の各地域の共同体の生活と結びついた歌もなかったはずはない。それが、民謡のプロ化・舞台歌謡化とともに、早くから人々の意識にのぼらなくなり、結局失われてきたのである。そして津軽の場合には、平館村に見られるように、生活や共同体の性質からも、そういう動きを生み出し易い条件があったのではないだろうか。

そしてこのような動きは、この二十年程の間に恐しい勢いで全国で急速に広がっているのである。

(三) 『青森県の民謡——民謡緊急調査報告書——』の

津軽民謡

すでに平館村について調べてみた一九八六—八七年の民謡緊急調査の結果であるが、念のため津軽地方に広げて再度調べてみた。その結果労作民謡は、青森市、平内町、蟹田町、今別町、岩崎村、中里町、弘前市、相馬村、平賀町、田舎館村、碓ヶ関村に辛うじて一曲ずつ、小泊村と黒石市に二曲ずつ、三厩村と藤崎町に三曲ずつあるだけで、しかもその大部分は漁の歌と土搦き歌で、農業関係の歌はきわめて少ないことがわかった。これは南部地方に比べるとやはり格段に少ない。たとえば三戸や八戸の地方になると、農業の労作民謡が田子町五曲、名川町七曲、五戸町五曲などと多いのである。やはり民謡緊急調査のように各地に在住する調査員が調べ上げたものでも、南部と津軽では大きな差が出ているのである。

やはり武田忠一郎氏が指摘しているように、津軽では伝承の形そのものが、ひじょうに早く変化してしまったのだと考えざるを得ないのである。

おわりに

津軽全体の社会状況については、ここで言及する程の調査を行っていない。しかし平館村の民俗音楽の状況に現われた特徴は、平館村だけの特徴ではなく、津軽の民俗音楽全体の特徴であることがわかった。津軽地方には、もちろん漁業とは関わりのない地域も広く、その意味では一般的な社会状況からいえば、平館村の特徴をそのまま津軽全体に広げることができない。ただ津軽全体にわたって近世以降、主として日本海沿岸の諸地方から大勢の人々が移住してきたこと、必ずしも水田稲作農耕中心の暮しではない人が多かったことなどの点では共通点もある。

そうした状況の中で、津軽の民俗音楽はこのように早く現代化したために、一方では津軽三味線という新しい魅力的なジャンルを生み、津軽民謡を全国的に有名な歌に仕立てあげたが、それはほんとうの意味でゆたかな民俗音楽を育くむことになったのかどうか、これから考えてみなければならぬ。それにしても津軽民謡の動きをさらにくわしく検討することによって、日本民謡の今後の方向を見定めることができるかも知れないと思う。

この稿を終えるにあたって、突然の調査にもかかわらず、快くご助力を賜った平館村教育委員会や木村キミエ氏、また多くの村の方々に深く感謝申し上げます。

註

- (1) 『青森県の民謡——民謡緊急調査報告書——』青森県教育委員会 一九七八年三月による。
- (2) 前掲書 五四頁
- (3) 前掲書 二〇四頁
- (4) 山田千里編『津軽民謡の流れ』青森県芸能文化研究会 一九七八年一四頁
- (5) 前掲書 一七一—一九頁

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Transmission of Folk Songs in Tsugaru District, Aomori Prefecture  
—Centering around Folk Songs of Tairadate Village—

KOJIMA Tomiko

Investigation of the folk music in Tairadate Village revealed that very few labor folk songs were handed down there; the only example was the “herring fishing song” which was once sung by the herring fishers. Songs which were closely tied with the local community life were also very few: in their place, the “Jonkarabushi”, known all over Japan, was sung as a Tsugaru folk song, and folk songs from prefectures on the Japan Sea side and Hokkaido were sung on the occasions of Bon-Odori (summer festival dances) or feasts.

So the author investigated how the people of Tairadate Village had handed down the folk songs. The results showed that of course some songs were memorized naturally in their daily lives in the usual manner. However, most of songs were memorized from professional singers, through radio, records, concerts of travelling artists, and “Bosama”, people who go from door to door singing for money.

Tairadate Village was opened up by settlers from around the 16th century onwards. Life centered on fishing continued for a long time, village communities organizations were not active, and people were rather free from the restraint of traditional folkloric phenomena which are generally handed down in community life: so the village was in a state where new things or things coming from the outside were easily accepted.

However, it was found that the way Minyô (folk songs) were handed down in Tairadate Village was common to the whole Tsugaru area. Tsugaru has produced a large number of professional Minyô singers since the 1910's, and the Minyô has been literally the staff of life. The Tôô-Nippo-sha, a typical local newspaper of Aomori Prefecture, has held a Tsugaru Minyô Contest since as early as the 9th year of Showa (1934), which has been accepted by the Tsugaru people enthusiastically.

Thus, on the one hand, Tsugaru Minyô have been made known nationwide by professional artists; but on the other hand, this resulted in the oblivion and decline of other local Minyô. What the Tsugaru Minyô experienced early on is now making an appearance in the Minyô of the whole country. In this sense, the state of Minyô music in the Tsugaru Region shows not only its regional characteristics, but is also an example which indicates the future trends of Minyô music all over Japan.